

平成22年度財団法人日本体育協会  
2010 Japan Sports Association

# クラブマネジメント指導者 海外研修事業 報告書

## Club Manager Training Project Report



スポーツ振興くじ助成事業



# 平成22年度財団法人日本体育協会 公認クラブマネジメント指導者海外研修事業 報告書

---

## ○もくじ

団長総括—ドイツ訪問と今後—	2
派遣団名簿	4
派遣日程表	6
派遣先マップ	8
講義概要	9
クラブ視察	31
団員レポート	41
派遣事務報告	75
フォトスナップ	81

# ドイツ訪問と今後

## 団長 丸山 順道

総合型地域スポーツクラブ全国協議会 常任幹事  
NPO法人923みんなんクラブ

2010年10月19日 夕闇迫るドイツ連邦共和国、デュッセルドルフ空港、機外に出た瞬間、異国の旅の始まりというより、懐かしいとさえ感じるほどの暖かい雰囲気を感じたのは、「なぜ」と自問自答する瞬間があった。それは、10年前、2000年10月24日、当時の文部省社会体育指導者海外派遣研修で同地を訪れたことによるものだとすぐに理解できた。当時、フランクフルト、ケルンとクラブを視察させていただき、心温まる対応を受けたことを思い出した瞬間である。

今回の派遣団員は、総勢15名、日本各地において活動されているマネージャーの方々である。その団長という重責を担えるのか不安の中で、結団式、壮行会を無事に終え、出発の運びとなった。それまで諸行事の関係から時間のない中で日程調整、多忙な方ばかりなので、団員のみなさんの体調など、心配が私の胸に広がっていた。集結し、団員の方々の顔を見、そして二言三言の会話の中で一瞬にその思いは飛散した。研修意欲に燃えた会話、スポーツ関係者として素晴らしい体調管理、むしろ、あらぬ心配をした自分自身に恥ずかしさえ覚えたのである。

昨年、SC全国協議会小倉幹事長を団長として第1期研修が挙行され、大いなる成果を修められたと拝聴していた。今年、去る8月26日、スポーツ立国戦略を文部科学省から出され、総合型地域スポーツクラブにとって重要な年となったのではないのでしょうか。全国には、3,200余りのクラブが誕生し、活動する中で「新たな公共」「コミュニティクラブ」などの諸施策について、まさに地域を根源として「地域づくり」の主役にクラブがなくてはならない。そうなる努力と組織を求められていると感じた。

そのような中での研修、大いなる先輩であるド



イツ、伝統あるクラブの訪問から「継続は、力なり」、また、伝統を重んじながらもニーズに敏感に対応するクラブ、伝統を大切にクラブライフを楽しみ、誇りにしている会員の姿など、まだ誕生してわずか10年たらずの日本のクラブは、学ぶべき点が大いに見てとれた。私としては、特に10年前には、学べなかった行政の在り方について、今回は、アクセル・ベッカー氏をはじめ行政の方々からレクチャーを受けたことは、大いに参考となり今後の活動に反映できる示唆をいただいた。行政の姿勢として、本来、行政として行わなければならないことをクラブが行っている。だから行政として、財政支援することは、当然である、との考え方。縦割り行政でなく、関係者が横断的に協議し事業を進める手法、そこには、当然クラブが主体的に取り組む姿勢やアクセル・ベッカー氏のようにクラブに関する諸問題を一元的に集約する行政セクションが存在することなどが条件となっていることが見えたように思われた。さらには、学校教育の中でトップアスリートを育成するシステムが行政・クラブ一体となり形成されていること。将来のクラブのあるべき姿の一面を垣間見ることができた。

今回の訪問で先進国ドイツでも課題があること

にも驚かされた。学校が半日制から全日制となり、授業は午前中に概ね終了し、午後の時間の対応について、遅れているようなことを聞いたが、長く慣習で続いていることに変化を加えることの難しさを感じた。まさに、これまで社会体育は、行政が無料で提供していき日本が受益者負担でスポーツを行うことに抵抗感が見られることは、歴史の中から見れば、自然のことなのかもしれないと思えた。

次にクラブ訪問の状況について記すと、どのクラブでも、旧知の友を迎え入れていただけるような、包み込まれるような大きな心を感じた。ドルボーリングでの交流場面では、スポーツライフ、クラブライフの楽しみ方の神髄を団員の皆さんが味わえたように思えた。これには、サプライズがあり、翌朝の地元誌に我々訪問団が写真入りで掲載されたことに驚かされた。さらにオルケン体操クラブでは、それぞれの国の歌の交歓が始まり、「すきやきソング」の大合唱でフィナーレになるなど、団員の皆さんとクラブみなさんの心の友好が図られたように感じられた。訪問を通じての特徴として、ドイツでは、高齢者と子どもたちが共にスポーツをするシーンは、想定されてないよう講義の中での質問で回答を得ていたがクラブ訪問においても、現実を把握することができた。日本では、スポーツを通じ異世代が交流することによって、コミュニケーションが生まれ、コミュニティの活性化、新たなコミュニティ形成につながるものと考え、事業として取り組んでいるケースは少なくないのが現状であり一般的と考えていましたが、こうした部分での歴史・文化の違いを感じた。

## まとめに

ケルンスポーツ大学教授であるフオルカー・リットナー氏の講義で話されたように、ニーズの把握と分析、そのための大学その他関係機関との連携、アクセル・ベッカー氏の繊細でアクティブな連携を促す行政、ネットワークを構築し、その中では、協力パートナーとして前に進もうとするムーブメントを形成させ、もしくは形成できるシステムが動いている。そして、さらに大きなネットワークを模索していることに日本の手本とすべきところと強く思った。

団員の皆さんは、講義、クラブ訪問と精力的にこなされる中でそれぞれの地域性やクラブの現状に照らし合わせながら、大なる吸収力を発揮されている姿は、崇高なものを団長として感じ、誇りに思った。

今、SC全国協議会が誕生し、スポーツ立国戦略が発表された現状をみると、SC全国ネットというクラブのネットワークに止まらず、行政や(財)日本体育協会、日本スポーツ振興センターなど関係機関の大きなネットワークの構築を創造することは夢ではないように感じ、帰国の途についた。訪問団全員事故もなく成田の土を踏んだとき、それは、訪問団の事業の終わりではなく、未来に向けた新たな旅立ちのはじまりと思えた。団員のみなさんは、熱い心で、それぞれの地で訪問から持ち帰った種を今後の活動を通じ、素晴らしい花を咲かせてくれるものと思う。

終わりに本事業に際し、ご尽力いただいたドイツ関係者の皆様、日本スポーツ振興センター、財団法人日本体育協会の関係各位の皆様へ深く感謝申し上げます。

平成22年度

# 財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 派遣団員名簿



団長

まるやま よしのり  
**丸山 順道**

所属：総合型地域スポーツクラブ全  
国協議会／NPO法人923み  
んなんクラブ

役職：常任幹事／理事長  
クラブ所在地：大分県国東市



副団長

なかざわ けん  
**中澤 謙**

所属：うつくしま広域スポーツセン  
ター企画運営委員会／会津大  
学文化研究センター

役職：委員長／准教授



総務

みやもと ただし  
**宮本 忠**

所属：財団法人日本体育協会 生涯  
スポーツ課

役職：係長



団員

すずき  
**鈴木 ゆかり**

所属：よりづか☆ちよいスポ倶楽部

役職：統括クラブマネジャー  
クラブ所在地：北海道北広島市  
資格：公認クラブマネジャー

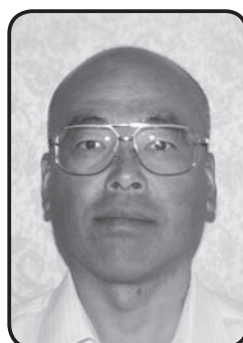


団員

ふるかわ まさひで  
**古川 雅秀**

所属：会津広域スポーツセンター

役職：チーフマネジャー長  
クラブ所在地：福島県会津若松市  
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

いづか ひろし  
**飯塚 裕**

所属：NPO法人スポーツクラブパ  
ンビィ

役職：事務局長  
クラブ所在地：福島県鹿沼郡  
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

おのざと じゅんこ  
**小野里 順子**

所属：うすねニュースポーツクラブ

役職：クラブマネジャー  
クラブ所在地：群馬県沼田市  
資格：公認クラブマネジャー



団員

まえだ よしや  
**前田 佳也**

所属：小糸レインボークラブ

役職：クラブマネジャー  
クラブ所在地：千葉県君津市  
資格：公認クラブマネジャー



団員

きくち ただし  
**菊地 正**

所属：NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF  
役職：副理事長 クラブマネジャー  
クラブ所在地：神奈川県川崎市  
資格：公認クラブマネジャー



団員

ながお かおり  
**長尾 香織**

所属：みわスポーツクラブ  
役職：事務局  
クラブ所在地：広島県三次市  
資格：公認クラブマネジャー



団員

のうた まさお  
**能田 雅雄**

所属：しおみクラブ  
役職：副理事長・事務局長（クラブマネジャー）  
クラブ所在地：愛媛県松山市  
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

さくらぎ えいいち  
**櫻木 英一**

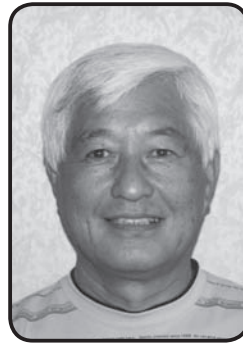
所属：NPO法人ウェブスポーツクラブ21西国分  
役職：公認クラブマネジャー  
クラブ所在地：福岡県久留米市  
資格：公認クラブマネジャー



団員

なかむら りょうた  
**中村 亮太**

所属：総合型うれしのほほんスポーツクラブ  
役職：アシスタントクラブマネジャー  
クラブ所在地：佐賀県嬉野市  
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

みやざき たけひろ  
**宮崎 武洋**

所属：長崎市西部総合スポーツクラブ  
役職：会長  
クラブ所在地：長崎県長崎市  
資格：公認アシスタントマネジャー



団員

けだはな えいた  
**慶田花 英太**

所属：財団法人沖縄県体育協会  
役職：クラブ育成アドバイザー  
クラブ所在地：沖縄県那覇市  
資格：公認アシスタントマネジャー

● 事業協力者 ●

**黒須 充** (福島大学)  
**多田 茂** (通訳)  
**井出鉄矢** (通訳)  
**松尾喜文** (通訳)

平成22年度

# 財団法人日本体育協会クラブマネジメント 指導者海外研修事業 日程表

日時	曜日	訪問地	主な行動
10月18日	月	岸記念体育館	15:00 集合 打合せ
			16:50 結団式・壮行会
		成田	17:45 成田市へ移動
			19:10 成田エクセルホテル東急着
10月19日	火	成田	09:30 成田空港へ移動
			12:20 成田発LH715便にてミュンヘンへ
		ミュンヘン	17:35 ミュンヘン空港着
			18:20 ミュンヘン発LH844便にてデュッセルドルフへ
		グレーベンブロイヒ	19:30 デュッセルドルフ着 バスにてグレーベンブロイヒ市へ移動
			18:40 Hotel Sonderfeld着
10月20日	水	グレーベンブロイヒ	09:00 ライン・ノイス郡庁舎 歓迎あいさつ ライン・ノイス郡スポーツ局長Jürgen Steinmetz ケルンスポーツ大学主任教授Prof. Dr. V. Rittner
			09:30-11:00 【講義①】「社会の発展とスポーツ」 (講師：Prof. Dr. V. Rittner)
			11:15-12:30 【講義②】「ライン・ノイス郡のスポーツ」 (講師：Axel Becker ライン・ノイス郡スポーツ相談課)
		コルシェンブロイヒ	コルシェンブロイヒ市へ移動
			13:45-14:45 【講義③】「自治体のスポーツ振興」 (講師：Hans-Peter Walther コルシェンブロイヒ市スポーツ課長)
			15:30-17:30 【クラブ視察①】コルシェンブロイヒ シニア世代スポーツクラブ 18:30 「ケーゲル (ドイツボーリング)」・夕食懇親会
10月21日	木	グレーベンブロイヒ	09:00-10:40 【講義④】「スポーツクラブの健康志向コース」 (講師：Axel Becker ライン・ノイス郡スポーツ相談課)
			10:50-12:30 【講義⑤】「スポーツクラブと小学校の連携」 (講師：Gisela Buck ライン・ノイス郡スポーツ相談課)
			13:30-14:30 【講義⑥】「クラブマネジメント (ヤン・カペレン体操クラブについて)」 (講師：Winfried Schmitt ヤン・カペレン体操クラブ会長)
			15:00-16:40 【クラブ視察②】TUSグレーベンブロイヒ
			18:00- 【クラブ視察③】オルケン体操クラブ 引き続き夕食懇親会

日時	曜日	訪問地	主な行動
10月22日	金	ドルマーゲン	09:00-11:00 【クラブ視察④】 TSVバイヤードルマーゲン ークラブと施設について、 子どもの体力向上、タレント発掘ー (案内：Axel Wertz TSVバイヤードルマーゲン)
			11:15-11:45 【講義⑦】「学校とスポーツクラブについて」 (講師：Hans-Peter König TSVバイヤードルマーゲン)
			12:00-13:00 昼食 (TSVバイヤードルマーゲンレストランにて)
			13:30- 【学校視察】 ドルマーゲンの学校 (ノルベルト・ギムナジウム) 【講義⑧】「タレント発掘事業について (学校とスポーツクラブの連携等)」 (講師：Christian Hentschel タレント発掘事業担当) 【質疑応答・評価・まとめ】 (Axel Becker ライン・ノイス郡スポーツ相談課)
		グレーベンプロイヒ	19:00-21:00 【答礼夕食会】
10月23日	土	ケルン	09:00- ケルンへバスで移動
			10:00- ケルンスポーツ大学見学
			11:00- ケルン市内見学、スポーツミュージアム見学
		ドルマーゲン	13:15- ドルマーゲンへバスで移動
			14:00- ハンドボールブンデスリーグ観戦
デュッセルドルフ	17:00 デュッセルドルフへバスで移動		
10月24日	日	デュッセルドルフ	07:45 デュッセルドルフ空港へバスで移動
			10:25 デュッセルドルフ発LH807便にてフランクフルトへ
		フランクフルト	11:20 フランクフルト到着
			13:35 フランクフルト発LH710便にて成田へ
10月25日	月	成田市	07:30 成田空港へ到着
			解散





# 派遣先MAP

Bundesrepublik Deutschland  
Land Nordrhein-Westfalen

## ドイツ連邦共和国



## ノルトライン・ヴェストファーレン州



# 講義概要



# 社会の発展とスポーツ

## ポスト工業化社会でのスポーツとスポーツクラブ

講師：フォルカー・リットナー 氏（ケルンスポーツ大学スポーツ社会学主任教授）

### はじめに

ケルン体育大学とノイス郡は互いに協力しながら、スポーツ振興に関わるさまざまなプロジェクトを行っている。このプロジェクトには、日本からも黒須先生が参加されており、様々なメンバーの協力により進められている。

このプロジェクトを学ぶために、2週間後には中国訪問団が私の元を訪れることになっており、これらの動きは台湾、韓国などでも同じように見られる。この動きに共通する理由として、アジアの国々では、ヨーロッパのように市民が率先してボランティアを行うようなことが根づいていないという事情が背景にあるのではないと思われる。

今回の講義では、このことに関連し、スポーツクラブが社会の発展にどのように貢献するのか、社会の発展に応じて何が出来るのかということを通じていきたい。



講師：フォルカー・リットナー氏

きた。フィットネスの誕生とともにスポーツの光景が変わり、多くの国で同じような傾向がみられるようになった。また、これに平行して栄養面でも意識が変わってきた。ノルディックウォーキングなどで体重、ストレスを減らすことが心臓病に良いといわれ、更に自分の脈拍を測ったりする人も増え、自分の健康状態に対する意識が強くなってきた。

ドイツでは、非営利のスポーツクラブ（サッカー、テニスクラブなど）が町の中に広がっていて、商業的なクラブは少ない。近年のスポーツの傾向はダイナミックに変化し、新しいスポーツができ、エロチックに変化してきた。このようなスポーツの変化に対して、スポーツクラブがどのように答えていけば良いのかということが重要な視点となる。

ボランティアで行われているクラブ数及び会員数の推移は1950年代から伸び続け、2000年でほぼ横ばいになった。スポーツを行う年代別としては、55歳～64歳が最も多くなった。伝統的に、子供など若い年代がスポーツを行う割合が大きかったが、それが全く変化し、スポーツを行う人間の高齢化がみてとれる。また、最近の傾向は、クラブに属さず、自分たちから適当な場所を見つけてスポーツを行う人が増えた。こういった人たちは、今後潜在的にも会員になりうるため、注目すべき

### ◎現代スポーツの構造的変化

ドイツで最古のクラブは、ハンブルグにある体操クラブで1817年に発足し200年近い歴史がある。長い歴史の中で、クラブも社会の変化に応じて変化してきた。当時のクラブでは規律というものが非常に大切なものであったが、時代が進むにつれて、様々な面で変化が生じてきた。たとえば、体操は元々とても質素なものだったが年代が進むにつれ、美的に美しいものに変化してきたことなどである。

1970年代後半からはフィットネススタジオが出現し、競技的・規律的な体操から、楽しみ、喜び、自分の為に体を作るなど、ダイナミックな動きを通じた体づくりに関心が移ってきた。スポーツに対する求め方が変わってきて、健康を意識したり、体型を美しくしたいという新しい傾向が強まり、更に新しい傾向として冒険を求めるようになって

である。更に商業的なクラブはライバルにあたる。

なぜ私たちはスポーツをするのか？という問いをたてた時、これまでは自分の競技力を高める、試合に勝つという動機が中心となっていた。それが現在では、競技性ではなく楽しみ、健康を求めるという傾向に変化してきている。最も頻繁に行うスポーツ種目は、サイクリング36.3%、ジョギング18.9%、フィットネス12.7%などで、社会の変化に応じてスポーツも変化している。こういった傾向は、歴史的、文化的に違った背景をもった国々でも、ドイツに限らずアジアでも同様である。

## ◎現代社会の構造的問題

現代社会の構造的問題として、グローバル化、個人主義化、疾病パノラマの変化、人口ピラミッドの大きな変化があり、それに応じてスポーツクラブでは何ができるかということが課題となっている。

人口ピラミッドが変化し、出生率が減り、高齢者が増え、社会全体が高齢化している中で、2つの大きな課題が出てきている。

①高齢者が社会から孤立しない事。

②高齢者の健康

それをサポートすることが必要だが、ケルンではスポーツクラブが街全体に広がっているということが重要な意味を持っている。

〈市民が抱える健康問題（ノイス郡調査）〉

背骨・関節の痛み：58.8%

運動不足による心臓循環器系疾患：31.7%

アレルギー：24.5%

呼吸器系疾患：22.2%

市民に改善策の調査をした結果、①スポーツをする、②栄養を考える、③医者に行く、の答えとなった。すなわち健康の問題がスポーツをする動機となっている。健康を意識する高齢者や女性が増えており、こういった人たちの要求に応じていくことが、クラブに求められている。また、調査の中には子供の肥満の問題もあり、小学校新生に調整力に対するテストをおこなったところ、肥満児が増えていることがわかった。そこで問題を抱えた小学生を対象にした様々な解決モデルを作

る必要が出てきた。現在、クラブ、医者、子供、親のネットワーク作りを進めている。

アジア諸国には見られないドイツの特長として、国とクラブが協力してこれらの問題を解決しようとする動きがある。アジアのスタイルでは、中央からトップダウンで物事が決定することが多くあるが、ドイツのスタイルでは、市民が中心になり国家がサポートをするという考え方があり、クラブを通して社会の持っているさまざまな問題を解決している。

## ◎必要不可欠な存在としてのスポーツクラブ

市民のボランティア活動についての調査を1999年、2004年、2009年に行ったところ、スポーツ、運動の分野でのボランティア活動が特に多いことがわかった。個人主義化が顕著な現代社会においては、スポーツが果たす役割が大きく、人々の社会性をどう進めるか、スポーツが持っているポテンシャルを生かして政策的な取り組みを考えていくことが重要である。

●スポーツ・ボランティアに加わる際の期待

1. 楽しいから
2. 気の合った人と出会える
3. 他の人の助けとなる
4. 公共の福利にとって重要
5. 見聞を広められる など

## まとめ

長年にわたりスポーツの風景が変わってきた。人口ピラミッドの変化とともに、社会も変化し、スポーツに対する要求や役割も変化してきた。スポーツは現代社会が抱える問題を解決する大きなポテンシャルを持っている。このポテンシャルを生かし、人々の健康や様々な要求をサポートするためには、町の機関（学校、病院、行政、企業）がネットワークを作り、問題に対応する仕組みを構築することが重要である。クラブのマネジメントも変わっていく必要があり、プロフェッショナルな能力を有するマネジャーが必要になってくる。

（報告：鈴木ゆかり）

# ライン・ノイス郡のスポーツ

## ドイツスポーツのシステム

### ライン・ノイス郡のスポーツとスポーツ振興

講師：アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課）

#### 1. ドイツのスポーツシステム

ライン地方はヨーロッパの中心に位置し、長い時間の中、多くの成長・発展をしてきた地域である。ノイス郡は面積57万6,200㎡あり、44万人の人々が住んでいる。加えて、ケルンスポーツ大学との提携が、経済的な面で大切な役割を担っている。

ノイス郡は、ドルマーゲン市、グレーベンプロイヒ市、ユッヘン町、カールスト市、コルシェンブロイヒ市、メアブッシュ市、ノイス市、ローマースキルヘン町の8つの市町から成り立っている。ノイス郡には、約350のクラブが非営利のボランティアで運営されており、住民の28%、約12万3千人が会員となっている。また、運営については、理事などの役員が約4,500人、資格を有するコーチやコース指導者約4,500人でクラブの運営にあたっている。このスタッフの中には、有給で生活を営んでいるマネージャーやコーチも150人ほどいる。

#### 〈ボランティア活動〉

1999年と2004年に自由意志に基づくボランティアに関する調査を14歳以上の住民に行ったところ、①自由意志に基づきボランティア活動に参加、②参加してもよい、③場合によって参加してもよい、④参加したいと思わない、の中で1999年には①～③までが60%、2004年には68%とさまざまな領域でボランティア活動に対する地域住民の意思が高まってきた。中でも、参加者の大変多いボランティア領域はスポーツおよび運動であった。ボランティア活動に求める期待としては①楽しいから、②気の会った友達と会えるから、③人の助けとなるから、④公共の福利にとって重要などが上げられている。組織形態としては、2004年の調査によると、クラブが43%、教会および宗教団体15%、イニシアチブグループが11%、国家地方公共団体が12%などとなり、ボランティア団体の組



講師：アクセル・ベッカー氏

織形態としてスポーツクラブが43%と整っている。このような調査結果から、ボランティアとして、スポーツを楽しみたい人が一番多く、人々は自由な意思で自分の生活の質を高めていくことに喜びを感じ、ボランティア活動に積極的に参加をしている。

#### 2. クラブの組織・財務・規模

##### 〈組織〉

組織形態としては理事長、副理事長、事務局長、会計係りを置いている。その下に女性責任者、スポーツ責任者、広報担当者、そして、青少年専任者各部門責任者を置いている。しっかりした組織形態が大切である。

##### 〈財務〉

収入のほとんどは助成金と会費である。助成金として、郡より100,000ユーロ、州スポーツ連盟から70,000ユーロ、クラブからの会費16,000ユーロであり、合計は186,000ユーロである。支出は、人件費250,000ユーロ、事務所経費15,000ユーロ、委員会費用3,000ユーロ、合計268,000ユーロである。収支的には、82,000ユーロの赤字となるが、研修コース等による営業所得の補てんでまかなっている。

### 〈規模〉

会員数300人以下73.2%、会員数301人から1,000人まで20.8%、会員数1,001人以上6%であり、300人以下のクラブが73.2%と一番多い。また、クラブを取巻く環境の変化から会員数も伸び悩んでいる。

## 3. 組織別クラブの問題・課題 ・役割・任務・奨励

### 〈クラブの主要な問題〉

ドイツの現状として、ドイツ人口は、約8,270万人である。高齢化が進んでいる。1980年、2000年、2020年の人口分布のグラフがそれを証明している。住民数も減少している。1990年から2001年までの住民数の変化をパーセントで表した表がそれも表している。そこにドイツ社会の構造変化がある。長いことスポーツの先進国といわれてきたドイツのスポーツも「少子高齢化」、組織に属さずに自由にスポーツをおこなう人がいるなど「クラブ離れ」などの問題に直面している。ボランティア会員の獲得、財政面、コーチおよび指導者の獲得など問題が定義されている。

### 〈群・市町村の課題〉

スポーツ施設の維持及び建設やスポーツ施設をクラブに譲渡するなど施設管理の問題及びスポーツ促進指針の実行などが上げられている。

### 〈郡市町村スポーツ連盟の役割〉

群・市町村当局に対してクラブの利益を代表する所である。クラブマネジャー及びコース指導者の要請及び研修の為にコースを実施する。市町村レベルにおけるスポーツ振興としては、地域住民に対するスポーツ・レクリエーションサービスの提供、スポーツクラブの支援、施設の管理運営、有望なジュニア・アスリートの発掘・育成などの事業に力を注いでいる。

### 〈州の役割〉

スポーツ施設建設の促進や学校スポーツ及び大学スポーツの促進など。スポーツ組織の促進をし、資金面で、コース指導者及びコーチの研修及び報酬に対する助成などを行う。

### 〈州スポーツ連盟の課題・任務〉

州の課題・任務としては、スポーツ建設施設の促進およびスポーツ器具の調達など、学校スポーツおよび大学のスポーツの促進も力を入れていく方向である。スポーツ組織としてコース指導者およびコーチの研修および報酬に対する助成も促進してゆく方向である。

### 〈州競技団体の役割〉

各種目の促進及び種目ごとに競技大会を開催する。タレントの発掘養成。州スポーツ連盟と協力して種目別コース指導者C級コーチの養成研修を行う。

### 〈連邦（国家）によるスポーツ奨励〉

競技スポーツの奨励連邦強化センター及び連邦支援拠点の創出及び運営連邦コーチ及び競技団体選任指導者の設置に対する財政支援。スポーツ医学的検査の促進など、連邦省庁間のスポーツ関連施策の調整を連邦内務省が行うなど行政サイドの支援ルートの仕組みが積極的になされている。

## 4. クラブ運営の3原則

### 〈自立の原理〉

上記の課題を踏まえ、各スポーツ団体は、自立の原理というものがああり、会員の意思に従って自立的に活動し、自由意志に基づいて決定し諸問題を自分たちで解決していく。

### 〈補充の原理〉

国家が、国家本来の使命である社会任務をスポーツが変わって果たす上で、理念および物資の両面でスポーツを促進するために支援していく。そして、総ての機関が「共通の目標」として目指す仕組みをいう。

### 〈協働の原理〉

そのためには、社会問題の解決が問題となる場面では、各機関がパートナーとして協力していくことが重要となり、これを協働の原理という。

ドイツでは、国家連邦の連邦省庁間のスポーツ関連施策の調査を連邦内務省が行う。さらに、10省がスポーツ問題に取り組んでいる。それぞれの立場で課題や任務にうまく取り組みドイツスポーツクラブの経営に役立てられている仕組みがつけられている。

(報告：小野里順子)

# 自治体のスポーツ振興

講師：ハンス・ペーター・バルター氏  
(ノイトランレストファーレン州 コンシェンブロンフィ市 スポーツ課長)

会場は元ビール工場の事務所で講義が行われた。

## 経歴

- ・ライフシッフィ市のスポーツ大学で勉強
- ・38才まで旧東ドイツにいたので東ドイツと西ドイツのスポーツシステムは熟知されている
- ・現在はボランティアでクラブの事務局や陸上のコーチを行っている

## コンシェンブロンフィ市のクラブ状況

○人口3万3千人で、その内1万2千人がスポーツクラブの会員となっており、人口に対して36%がクラブに加入している状況。ドイツにおける平均的なクラブ加入割合は29%だが、割合を比較してコンシェンブロンフィ市はスポーツに友好的な町と言える。

### ○会費

一般的なクラブ会費設定（州のスポーツ連盟から）

子供会費 月/32ユーロ

大人会費 月/72ユーロ

現状の平均的なクラブ会費設定

子供会費 年/60ユーロ

大人会費 年/100ユーロ

### ○クラブの規模と数 全部で38クラブがある

- ・1000人以上→3クラブ
- ・500～1000人以上→7クラブ
- ・500人以下→28クラブ

### ○市民に対して振興手段

転入された方を対象に市の各クラブの案内やコース紹介の冊子を作成している。



講師：ハンス・ペーター・バルター氏

### ○市内のスポーツ施設状況

大きなスポーツ施設	5	サッカー場	6
小さなスポーツ施設	10	軽スポーツ施設	8
屋内水泳場	1		

### ○スポーツ法（法に基づいて市民は色々なスポーツ施設を利用する権利）

ノイトランレストファーレン州にはなく、スポーツの位置づけは市民の自発的な活動であるので施設を利用する権利は保障されておらず、町でスポーツを奨励する法はないが奨励している。

### ○財政

全般的にドイツ内の各自治体は赤字であるため政治家の中にはスポーツに対する助成をとりやめる考えもあるが、コンシェンブロンフィ市ではスポーツの奨励をしており年間5万ユーロの助成金を出している。

ノイトランレストファーレン州からコンシェンブロンフィ市へ8万ユーロ助成金の予算がくる。

市からクラブへの助成金は、

- ・スポーツクラブの青少年活動に対して2万7ユーロ
- ・個別的に活動に取り組んだ団体には奨励金として2万3千ユーロ

州のスポーツ連盟の利用経費を市が負担

- ・コース指導者養成費用

これらの助成金をクラブが受けるために条件がある。

- ・町の中に事務局があること
- ・クラブ名に町の名前を入れること若しくは町の一部の地域名を入れること
- ・クラブ会員は州の住民であること
- ・活動内容が非営利だと示すこと
- \*申請の際に各クラブは州のスポーツ連盟に対して会員数を毎年届出を行うことにより、自動的に保険会社と契約されているので、クラブ活動は保障されている

コンシェンブロンフィ市で38のクラブ (SV)

↓ 会員

群のスポーツ連盟の数8つ (SSV)

↓ 会員

ノイトランレストファーレン州のスポーツ連盟の数54つ (KSB)

↓ 会員

ドイツのオリンピックスポーツ連盟 (DOSB)

このような組織図で全体がドイツオリンピックスポーツ連盟の会員になっている。

クラブは以上の条件を満たし助成金を受けるため州のスポーツ連盟、群のスポーツ連盟、そして市の助成金を申請を受けることができる。



講義風景

また、非営利で活動しているクラブは町から助成をうけている

- \*行政は、クラブ全体予算に対して25%が自主財源でまかなえることを期待している。

## 行政サービスの種類

### ★施設

- ・町のスポーツ施設を無料で利用できることを提供しているが、エネルギー費用（電気料・水道料）は1時間/1ユーロ支払うようになる。エネルギー節約として呼びかけ、将来も定額一律1ユーロでおこなう

### ★補助

- ・青少年活動に対してクラブをサポートしている。コーチの養成/コーチの研修/指導者養成/その他の費用は市が負担している。
- ・高価なスポーツ用具をクラブが購入する際、費用の25%は市が負担している。
- ・クラブで必要としているパソコンやソフトウェアなどの補助金を出している。
- ・重要な大会、スポーツ大会が開催される場合に助成金を出している。  
(町で開かれる競馬・陸上大会で他の州から選手などが参加する場合)
- ・優秀な成績を収めているチームに対して、経費の一部を市が負担している
- ・クラブで施設を所有している場合の整備費を助成している
- ・毎年、テニスクラブのコートの芝の張り替え費用は市が補助をしている。(年/700ユーロ)
- ・クラブが自分の体育館を作り所有したい場合の助成金の援助はないが市の敷地を提供する。

- \*毎年12月にはスポーツで貢献された人を表彰する

「ガーナ」というイベントで市長が来られ毎年約200人の若いプレーヤーにメダルを授与しドイツから有名なスポーツ選手を招待して楽しく交流をしている。

(報告者：長尾香織)



# スポーツクラブの健康志向コース

## 健康志向のプログラム・コース提供について

講師：アクセル・ベッカー氏（ライン・ノイス郡スポーツ相談課）

### はじめに

ドイツでも、日本と同様に少子高齢化が進んでいる。その中でクラブがどのように関われるか、答える必要がある。クラブマネージャーはクラブの存続を確立するために、健康を考えたプログラムを考える必要がある。その為には、スタッフ・施設・財政をしっかりと考えなければならない。

講演内容は

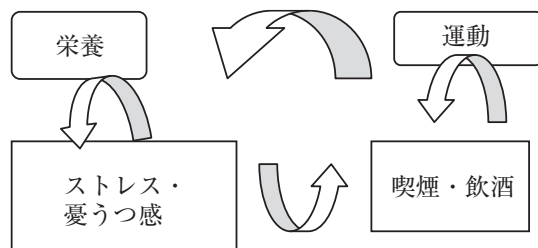
- ・現代における「健康」の意味
- ・健康志向スポーツのための基本枠
  - 法律と契約に関する基礎
- ・スポーツと健康の関連性
- ・「スポーツと健康」コース
- ・スポーツクラブの基本条件
- ・ファイナンスとマーケティング

昔はスポーツといえば競技スポーツが主であったが、今は運動・スポーツを通して健康に繋げる、という考えが強まっている。スポーツクラブはその為に何ができるかが求められている。どのような事で健康を考えられるか？スポーツクラブはそのニーズに応える必要がある。健康を語る上で、何が大事か・何が必要かを考える必要がある。

### 健康のマイナス要因

喫煙・飲酒・ストレス・憂うつ感・友人社会との関係

それらを改善するには栄養・運動が有効である



講師：アクセル・ベッカー氏

スポーツをすれば健康は大丈夫かと言うとそうでもない。健康に関するシステムは色々ある。それをスポーツクラブでは考える必要がある。色々な運動プログラムの他に、話し相手を作り楽しい時間を過ごせる場の提供など。

健康の為に何かをする、自分の健康は自分で責任を取る。病気になってリハビリをするよりも病気にならない為の予防を考えるのが大事である。治療・リハビリ・ケアと並ぶ健康管理の4つ目の柱として予防が大切である。

スポーツクラブはボランティアで運営しているが、スタッフに資格を持った人を取り込むシステムを作ったり、プロフェッショナルなスキルを持った医者・理学療法士・また保険会社などの連携が考えられる。スポーツクラブは全ての病気に関するプロフェッショナルではないし、全てに関係できるわけでもない。機能・ライフスタイルについて提供できるのだから、医者・理学療法士などを活用した健康に関するプログラムの提供を考える。スポーツのコースを提供すればよいというものでもない。クラブの特徴として、健康を柱としたプログラムを持っているということを外部に向けて発信する事も大事である。そのプログラムが

国の健康システム基準を超えていれば国や保険会社からの助成が期待できる。

健康志向コースを提供する時に考えておく事は人々がどんな事を望んでいるか？も調査しどのようなコースなら助成があるかなども知っておくべきである。

今、ドイツでは、大人を対象にしたコース79%、子どもを対照にしたコース12%、高齢者を対象にしたコース9%であるが、これからはどんどん増えると思われるし、子供の数は減っていく中で健康面の問題をかかえる子どもは増えていくものと考えられている。また、心臓病・循環器の疾病患者へのリハビリコース・運動に支障のある学生や、社会・企業でのストレス回避のコースは郡や市が審査し認められると保険会社からの助成が受けられる。国がやるべきことをスポーツクラブが代わりにやってくれている、と言う考えが行政側にある。

ただコースを作ったからといって待っているは会員獲得はできない。外に出て発信しなければならない。幼稚園・学校・養老施設・企業などを訪ねて、現場でその人にあった指導をしてあげて、スポーツクラブの良さをアピールしなければならない。

健康志向コースを提供する場合の目標には次の6つが考えられる。

- ①身体的な健康資源の強化
- ②心理社会的な健康資源の強化
- ③リスク要員の削減
- ④身体的な苦痛及び不調の克服
- ⑤スポーツ活動習慣の構築
- ⑥運動条件の改善

またリハビリテーションのコースでの目標は

- ①身体的障害による影響の保障
- ②身体的及び精神的負荷に対する耐用性の強化
- ③自分で生活を律し、責任を持つ事
- ④自己観察と身体近くへの勧め
- ⑤健康に向けての生活態度の変更
- ⑥生活の質の向上

国、郡、市、保険会社がスポーツクラブに期待している事

- ①活発な活動

## ②質の高いコース

## ③優れた組織性や信頼性

## ④健康領域での要求全多に対する行き届いた配慮など

予定されたコースが無くなったとき、バレーボールなどの競技スポーツなどは大した問題ではないが、郡、市、保険会社などから助成されているコースが無くなれば問題である。

健康志向コースはクラブにもたらすチャンスである。

## ①会員獲得

## ②新しいターゲットグループの獲得

## ③地域の力としてのイメージアップ

## ④有資格スタッフの獲得

## ⑤他の健康関連団体との協力が得られる

## ⑥財政手段の獲得

## ⑦将来性の計画と保障

他のコースも同様であるが市場にはライバルがある。商業施設との競争をしなければならない。また、有資格者の獲得、運動の場、装備の整備組織と管理事務、マーケティングと広報活動などが必要であるが、これらをクラブマネージャーに任せるのではなく負担を分担する必要がある。スタッフにマネジメントを分担するのは大事である。

スポーツクラブのキャンペーンは、政治家・医者・保険会社が協力して行うと効果的である。各クラブが単独でやるよりも多くのものが集まってやった法が効果が期待できる。手段としてアニメなどを使うと分かりやすい。ポスター・パンフレット・新聞などの手段が考えられる。

## 総括

- \* 健康は、ますます重要性を増す社会的要因である。
- \* 健康志向コースは、人々の健康保持をサポートする
- \* 健康志向コースは、クラブの将来性を高めるのに貢献する
- \* コースのプランニング、組織実施には体系的で品質を重視した取り組みが必要である

(報告：宮崎武洋)

# スポーツクラブと 小学校の連携

講師：ギーゼラ・クーフ女史（ノイス郡学校スポーツ委員会事務局長）

はじめに自己紹介をします。私は、水泳の選手でした。現在は、学校との連携を専門にしています。3人のスポーツ選手の母でもあります。

今日は、次の5つの内容について説明いたします。

- ①ドイツの学校システム ・構造 ・学校形式
- ②学校とスポーツクラブの連携による利益と動機
- ③行動領域
- ④具体的な協力の可能性
- ⑤連携実現に向けた段階と道

## ①ドイツの学校システム

### ・構造

日本のシステムとの違いは、州の管轄であり州によって少し違いがあり、これには長所と短所がある。全体の特徴は、まず一つ目にトップダウン方式であり州の局長から始まって、市町村の学校課を通し教師へと上から全体の枠組みが下される。しかし、実際の中身に教師たちの独立性が求められている。学校によって非常に特徴が出てきて、ある学校では音楽に、またある学校では国語に重点を置く等さまざまな違いが出てくる。数年前ピサ調査があり、ドイツの教育レベルが他国に比べて低いことにショックを受けている。いま問題を抱えている。

特に大きな変化として言えることは、数年前まではドイツの学校システムとして低学年の子供たちが学校にいるのは8:00～12:00位であったのが、8:00～17:00へと移行し、子供の世話をするシステムをスポーツクラブと連携して午後から行う取り組みを模索している。

### ・学校形式

カテゴリは幼稚園が3～6歳、第1教育が6～9歳の4年間基礎教育を受ける。そして第2教育が10歳以上で本教育となるここまでの義務教育である。それ以前は、各家庭の個人の自由責任にお



講師：ギーゼラ・クーフ氏

いて行われている。

ドイツの学校システムは日本のシステムと異なり非常に複雑で道が数本あり、数年前からまた少し変わった。2年前からギムナジウムは12年から大学へ行くようになった。以前は、13年からで1年短くなった。授業が減ったのではなく、1時までの授業が17時までになったので1年詰まった。

## ②学校とスポーツクラブの連携による利益と動機

これまでの子供達は1～2時に学校が終わって、その後スポーツクラブに行きスポーツを行っていたが、現在はどんどん変わってきている。最初の4年間の基礎教育の授業は、8:00～13:00は今まで通りで、13:00～17:00について両親が希望すれば、さまざまな活動を学校の中で行えるようになった。それはスポーツであったり音楽であったり、あるいはほかの学習科目など多義にわたる。

傾向として、従来は40%が学校を終えてスポーツクラブへ行きスポーツ活動をする、60%が学校へ留まってさまざまな活動をする。それが現在は、30～70%の対比に変化しつつある。学校を終えスポーツクラブで活動をする子どもたちが減少傾向にあり、逆に学校にとどまってさまざまな活動を

する子どもたちが増えてきている。

学校とスポーツクラブが連携することにより次の様な利益が生まれてくる。

- (1)学校とスポーツクラブが子供の世話に関して責任をもつ。
- (2)学校側として学習プランにないことを提供することが出来るようになる。
- (3)スポーツクラブ側は、社会的貢献の責任はあるが、現在の変化を踏まえてスポーツクラブ自身も変わっていかなければならない。学校側に向いて子供の世話の協力をするとかが必要となる。
- (4)学校とスポーツクラブが協力することにより、よりフレキシブルになる。スポーツ能力がたけている子供にスポーツクラブの専門性を提供してもらい、そうでない子には、学校にとどまりサポート体制を長期間にわたり提供できるようになる。
- (5)さらなる特典として子供たちにとって、施設の長時間利用が可能となる。
- (6)この協力体制により、施設の有効活用が可能になり得るようになる。

### ③行動領域

しかしクラブ側にとっては問題となっているところもある。学校側が午前中だけでなく午後も学校施設や公共施設を使うことになると、トラブルの種になりスポーツクラブの活動に支障をきたすことにもなる。そこで学校とスポーツクラブが協力関係として何が出来るか、どのようにすべきかが問われる。

- (1)午後の時間帯に子供達の世話をする機会が増えた。
- (2)子供自身がすることとして、上の子が下の子の世話をボランティアで面倒見れるような機会が増える。
- (3)女の子たちにとってスポーツクラブの利用が難しかったが、容易になりだした。
- (4)運動能力に問題のある子供達にスポーツする機会ができた。
- (5)家庭の面で非常に収入の少ない子供達は、問題を抱えているケースが多いが、そんな子供たち

にも、門戸が開かれ学校との連携の中でチケットの様なものが貰えてスポーツをする機会ができた。

### ④具体的な協力の可能性

何をどのようにしていかなければならないのかについて説明する。

- (1)これまで通り学校体育は学校で行い。授業の後にチームを組んでクラブより指導者に来てもらいサポートを受ける。このスポーツ活動は、週に1回2時間、若しくは週に2回1時間と言う対応もある、これに対して助成が州のスポーツ財団より年間約225ユーロ支払われている。
- (2)運動能力に問題のある子どもたちを普通の水準まで持っていこうという目標としたコースを設定しグループを作って、運動をしてもらう。と言う取り組みも行っており、これもやはり週に1回2時間行い、助成金が年間350ユーロ出ている。
- (3)タレント性のある能力の高い子供を集めたグループを作り、学校側とスポーツクラブ側が協力して子どもたちのサポートをする。週に最低2時間、学校を代表して試合に出たりするので、その指導者に対しては余分にお金が出る。助成金が年間900ユーロ。これらの競技スポーツの一番下のカテゴリに値するグループの子供達は、同時にスポーツクラブの会員でもありその団体の一番下に所属している。発掘し将来性を見据えサポートしていく。
- (4)各グループ作り、お金をもらうためにノイス群に申請している。現在170グループあり、州の予算とマッチしている。

※グループの内訳は、(1)と(2)で約50%、(3)で約50%となっている。(3)の競技種目は定められていて14種目しかない。これはスポーツクラブと学校が決めた種目である。ただし(1)、(2)の2グループについては、制限がない。さまざまな種目やコースを申請して事業を展開している。

※この申請は、直接州に対してするのではなく学校スポーツ委員会（クーフさんがこの責任者）を通して申請することになっている。

さらにそれを超えて助成を受ける事が出来るプ

プロジェクトやプロジェクト週間の実施資金を群のスポーツ課と協力しながらイニシアチブを取って、学校スポーツ委員会に申請することができる。

### ⑤連携実現に向けた段階と道

- (1)2003年から全日制が導入されて学校とスポーツクラブの協力体制が進んできてさまざまな事が起きた。その一つとして、13:00～の自由時間という活動が入ってきてスポーツクラブ以外の団体（音楽、文学など）が関わるようになったので、うまく時間の調整をしながら話し合いを図った。
- (2)13:00～17:00の間は学校側にとっても自発的なものなので、学校により対応の違いが出ていたので、クラブ側と学校側がしっかり話し合いの場を設けて進めるべきものである。

## Q&A

Q ①実際のイニシアチブはクラブか学校か局か教えてほしい。

②放課後子供たちのサポートをするのに、ライセンスが別に必要なのか。(丸山)

A ②特別な資格は必要ない。しかしスポーツ指導者としてのライセンスは必要です。

①あまり簡単なことではありません。自分たちのクラブで提供できるものを紹介しても特別な道としては学校側から『こういう子供達がいる。促進したい。奨励したい。改善したい。』等の要請がある。個人的なつながりがあり、アプローチがある場合がほとんどである。学校スポーツ委員会があり年に2回、学校とスポーツクラブの関係者が集まり情報提供の場であり、両機関の斡旋をしている。

Q ①日本の教師は、小学校が総合職、中学校以上が専門職となっているがドイツはどうか。

②先生方は、午後は何をしているのか。

③子供たちに強制的に参加させることになる

のか。(菊池)

A ①ドイツも同じです。しかし宗教の先生とスポーツによっては少ないかは別です。ノイス群で進められているのは小学校の先生にスポーツの指導者ライセンス取得講習会に参加していただいて、資格を取ってもらう。現在40名いる。学校とスポーツクラブの連携が保たれていることによるものです。

②これまでは13:00～は開放されると同時に先生方も開放されている。いろいろな団体に関わり学校が協力体制の理解者として関わっている。今ドイツの事情として非常に変動期にある。基礎学校の最初の4年間は全日制ではない。13:00からの時間に他の団体に入ってもらってその上のカテゴリもすべてが全日制ではない。ジムナジウムも基本的には13:00で終わる、特別な機関により17:00までサポートしている。特殊なジムナジウムもある。そうすると17:00になってからスポーツクラブに参加することになる。州によって、地区によって、学校によってさまざまな対応が求められている。

③現在データとして基礎学校の95%が午後の時間を取っていて、そこに通っている児童の60～70%の子供が利用している。

Q ドイツにはクラブと言う良いシステムがあってそのうえ今変動期だというお話がありましたが、そんな課題がある中、子供たちにクラブに行けではなくて、学校にそのオープンな全日制になりつつある根本的な理由の部分について、スポーツを展開するうえでの価値観とかがあるのか知りたい。

A 自分の経験から答えると、社会的な大きな変動がある。両親が仕事をしている。片親で世話をして下さるシステムが必要となっている。これは、政治的に上のレベルで決定した事です。下からの要求があって出来たものではなく、政治家は理に合った決断する訳ではない。政治家には様々な方がいるので大きなテーマである。今、私が紹介しているものは

ノルトラン・ヴェストファーレン州の事情で、他の州へ行けば、また違った事情があります。両親にとって自分の子供たちがどう午後を過ごしてもらうかは、両親の判断で決めなければなりません。

- Q 日本には学校部活動があるがドイツではそのような可能性はあるのか。(中村)
- A ドイツは大きく事情が違っている。教師は授業をするもの。それ以降の活動に関しては、可能ではあるが、通常他の機関(スポーツクラブ)からお金を払って来てもらっている。教師としては、23時間の授業しなければならない義務があり、授業の準備があるので午後は開放されるが通常は準備に使っている。
- Q こちらからの質問です。日本の課外活動について教師の自発的なのか、義務なのか。
- A 学習指導要領には、位置づけられているが、義務ではないのでやらない先生もいる。過渡期である。

※ドイツには、白と黒しかないのに日本ではグレーゾーンが存在するらしいですね。6週間の休暇も自由にとれないそうですね。ドイツでも放課後チームを指導する熱心な先生はいる。自分で自分に必要性を求めて活動している先生もいる。学校としてもそういう先生を必要としている。クラブ側からすると学校と連携することでより有益な動機となっている。学校での活動を拡大できるのと、優秀な子どもを獲得できる可能性が広がる。ただしクラブの問題点としてあげられる事は、基本的にボランティアで活動しているので、さらに課題が増えると言う事になる。自分の本業とバランスを取るのが難しくなってくる。

## ②最後に(段階としての連携)

人脈も無い方にとっての必要性は次のとおりです。

- ・まず準備段階(学校とスポーツクラブが同じテーブルにつく必要性ある。)
 

学校でどういう事が起きるか。まず体育教師のグループ、学校経営陣、生徒代表、両親、すると学校会議が動く。

では、学校とスポーツクラブがどういう要求があるのかが大切。

明日伺うドルマーゲンの大きいクラブは優秀な指導者、立派な施設を持っている等要求がある。
- ・次の段階として(両者がコンタクトする段階になりどの機関を使い進めていくかが重要である。)
 

どの機関への働きかけ、助成による享受の相互関係が必要とされる。

そのうえ政治的協力体制を取り付けなければならない。

さらにこの協力関係についてメディアに来て載いて、広く周知を図る。
- ・互いにパートナーが見つかったところで具体的に話を進めて行く。

- Q スポーツユエгент(スポ少)は何か具体的な役割があるのか。(桜木)
- A 州の組織する団体の中に入ります。スポーツクラブの中には、青少年の部があり、この部は独立していて、自分たちのやりたい事を自分たちで作っていく。18歳まで所属できる。これは一つの政治的なメッセージでもある。子供たちの独立性を認めている証となっている。もう一つは財政的な部分があり独立させることにより予算を付けやすい。

(報告: 飯塚 裕)

# ヤン・カペレン 体操クラブについて

講師：ヴィンフリート・シュミット氏（ヤン・カペレン体操クラブ会長）

グレーヴェンブローイッヒ市には70のクラブがあり、あらゆる種目が17,000名の会員に提供されている。その中でも1906年に創設された「ヤン・カペレン体操クラブ」は最大のクラブであり、15種目、50コースが1,700名の会員に提供され、サービスそして競技能力の点においても地区を代表するようなクラブに発展してきた。

また、会長のヴィンフリート・シュミット氏とアクセル・ベッカー氏とは、個人的にも長い付き合いの友人で、共通の趣味がコンピューターであることなどから、ベッカー氏からクラブのマネジメントを補助するソフトウェアの提供や指導なども受けている。



講師：ヴィンフリート・シュミット氏

## 1 クラブ概要及び提供している種目・コース

会員数1,700名

提供種目15種目

50名のコース指導者が働き、毎週50の異なったコースを提供、年間にすると全体で10,000時間にも及ぶ。

ベースボール、ティーボール、障害者スポーツ、フィットネススタジオ、心臓スポーツ、柔道、陸上、子供たちのダンス（調整力の問題のある子供たち用のコース）、自転車、背（脊柱）の予防矯正のコース、体操、水泳、スキー（調整力トレーニング（ギムナスティック））、ヨット、母子が一緒に行う体操、バレーボール（ビーチバレーボール）、ウォーキングなど何十年と提供している各種目及びコース（サービス）の一部が写真により紹介された。

これらの種目やコースを改善したり、新しいものを付加したりしてサービスの充実を図り提供してきた。

## 2 クラブの生い立ち・歴史

1906年、5本の指にも満たない少数の男性体操クラブとして創められ、Jahnは当時の指導的な方の名前で、T (Turnen) は体操、V (Verein) はクラブで、「TV Jahn」となった。

第一次世界大戦（1914-1918）でクラブ活動は下火となったが、戦後徐々に再開し、1920年代になると女性会員が加入し、種目ではハンドボールやカヌーが加わった。

第二次世界大戦（1939-1945）が始まるころまでは、非常に小さな小グループによる活動で、戦後10年間はクラブの運営が困難な時期でもあった。

1950～60年代にクラブの会員数が250名位に増加し、カペレン（Kapellen）という地区を中心したクラブとして展開した。

60年代から70年の始めまでは、利用できる施設が小さな体育館と野外の確保した場所しかなかったため、いろいろな種目のコースを提供することは不可能であった。

70年代になると運動に対する意識が高まり、国民にスポーツ活動してもらおうとする運動が起こった。その時に大きな役割を果たしたのが「ゴールドンプラン」で、スポーツを通して人々の健康

を促進しようとするもので、州のスポーツ連盟の音頭の下、大きな活動が行われた。このゴールデンプランは、一方ではドイツ全土にスポーツ施設の建設・整備を図るもので、学校そしてクラブが利用できるような体育館やテニスコートの建設など盛んに行われた。

これを機会として、クラブにいろいろな種目が加わった。特にテニス部門は人気を博し、この部門だけで300名と大きなものとなった。

これと同時に盛んに行われたのが、コースの指導者養成で、研修に参加し資格を取得するもので、ドイツ全体のスポーツ連盟の音頭の下、州のスポーツ連盟、さらに郡のスポーツ連盟、町のスポーツ連盟、各スポーツ団体が大きな働きをした。このような経営の中、特に生涯スポーツに関連する分野がクラブの中で盛んに行われた結果、68年には300名程度であったものが、2000年には2,000名の会員を擁するまでになった。

ヤン体操クラブは、地区の中でもいろいろな部門、会員のためのサービス、各スポーツの能力など地区を代表するようなクラブに発展してきた。この時期に忘れてならないのが、75年ゴールデンプランが進んでいた時期に行われた行政区の統合で、この地区グレーヴェンブロイヒが周辺地区を統合し大きくなっていった。

現在、グレーヴェンブロイヒ市には、70のクラブに17,000名の会員が登録され、あらゆる種目が提供されている。中でも当クラブは最大のクラブであり、競技能力の点でも最も強力な選手を輩出している。

こういった発展の中でクラブは財政力を強め、テニスコート5面、野球場、テニス用や事務局用のクラブハウスを過去10年の間に建設・整備、このほかに大規模な体育館を運営している。また、屋内プールも所有し、フィットネスコースやサウナも提供しているが、経費が大変かかるため運営は、年々大変になっている状況にある。

提供種目・コースについては、伝統的なスポーツ種目と並んで、新しいトレンドとなるような種目、特に健康に関連する種目、そのコースをたくさん取入れ提供している。また、背骨に関する問題を予防するコースや心臓病予防のスポーツさ

らにリラックスを目的としたコースも提供している。このような特別なコースは、70年代に進められた「国民にもっと運動を奨励した動き」と同様の大きな運動であり「国民が抱えている健康上の問題」それに対応するコースを奨励するという動きの中で進められてきており、費用の全額または一部を保険会社が負担している。

### 3 直面する課題と対応

最近5年間で経済的に困難を抱えた家庭が増加すると共に、スポーツの重要性の意識が薄れてきた。その中身について2つの指摘がされた。

- ①家庭が財政的に困難を抱えてきている。
- ②家庭での働き手に対する職場の要求の高まりにより、夜でも働く人が増加している。

このようなことから、スポーツをしにくい環境としている。

加えて、幼稚園の建設や小学校レベルでのオープンな全日制が起こってきた。このことは、クラブにとって新たな対応を迫られる動きとなってきている。これまでは、学校が終われば、自分たちのクラブに来ていた。ところが学校の枠の中で、子供たちへの指導が行われるということで、会員数に与える影響などクラブにとって新しい対応を迫られる問題となった。会員数が著しく減少していることはないものの、将来的どのように会員数に変動を与えていくか、まだはつきりつかめていない。

これに対応するものとして、私たちは就学前児童に焦点を当てていくということと高齢者に対する運動の機会を与え、コースを強化していくことを考えている。

### 4 クラブ内の組織と運営

クラブの中に、15種目の部門がありトップに立つ理事がいて、純粋スポーツを行うことに責任を持っている。理事の人数にはバリエーションがあり、ベースボールや競技スポーツに関連する部門など、たくさんの方々に協力してもらわないと良好な維持・運営ができないため必然的に理事も多い。



クラブ全体の組織としては、会長、副会長、事務局長さらに経理担当者がある。この4人がクラブ全体の経営に当たっていて、2カ月に1度、この4人の経営陣と種目部門の理事でミーティングを行い、さまざまな報告と問題解決に当たる。また、各部門からの報告は、12年前からインターネットにも掲載している。

さらに、3カ月に1度（4回/年）クラブ新聞を発行し、インターネットに掲載した記事もこの新聞に載せて一般の方々に提供している。なお、経営陣と理事は全てボランティアの活動で、各コースの指導者には賃金を支払っている。

また、クラブ内の管理に関しては、ベッカー氏から譲り受けた管理ソフトを導入し運用しているほか財政面での記帳などクラブの経営全体の管理をしている。

## 5 質疑応答

**Q1** 最近のミーティングの話題は？

**A→** プールの維持・運営費に対し、市からの助成を受けること。利用者のデモンストレーションもあり、9月に入り今年度に限り25,000ユーロの助成を受けた。

**A→** ミーティングの際の各スポーツ部門からの活動報告(部門のことから全体のことまで)例えば、夏の子供たちのフェスティバルの実績

**A→** クラブの売上は350,000ユーロ/年

**Q2** 収入の内訳は？

**A→** 収入の内訳は、会費、スポンサーの寄付金、州・郡の助成金、一般の方も参加できるコースの収益など、支出は収入より若干下回るがほぼ同額で、差額を施設整備のために備蓄している。

**Q3** ライン・ノイス郡の13時以降の学校の過ごし方の変化に対する影響は？

**A→** 会員数が減っているということはあるが、極端な影響はまだ出ていない。今後の展開次第である。

**Q4** 学校との連携は？

**A→** 当クラブでは、技術的に学校との連携は難しいところがある。

コースの指導者を学校に送って、面倒を見るには2つ問題がある。

①生徒が定められた枠の中に入っていて、時間的に合わすことができない。

②財政面、収入と支払のバランスが悪い。(学校側からの支払い提示5ユーロ/時、民間80ユーロ/時)

以上の2点で難しい。

現在の動きに対してネガティブ見ているわけではないが、クラブの運営の立場から対応が非常に難しい面がある。今の動きがどのように展開していくのかしっかり見極めなければいけないし、見ているところでもある。

**Q5** 日本では行政区の合併がクラブの発展を阻んでいると事があるが、ドイツでの行政区の合併時、クラブをどう発展させたか？

**A→** ドイツの場合は、行政区の統合がスポーツの発展にとってプラスの影響を与えた面の方が大きい。統合は人件費の削減や他の地区の施設も同じ町の施設として使用できるようになったなどポジティブな影響を与えてきた。

**Q6** ゴールデンプランがあり、その運動が進められていたから合併がやりやすかったのではないか？

**A→** 並行的・同時期にゴールデンプランと行政区の統合が進められた。

(報告者：前田佳也)

# 学校とスポーツクラブ について

講師：ハンス・ペーター・ケーニッヒ氏 (TSVバイヤードルマーゲン半日制寄宿舍事業責任者)

ドルマーゲン市 人口：約63,000人  
ノイス郡 デュッセルドルフ行政区  
ノルトライン ヴェストファーレン州 (強化拠点がドルマーゲン)

## 〈学校に関する基本データ〉

- 4つの強化種目がある→  
ハンドボール、フェンシング、水泳、陸上
- 13小学校、13全日制小学校
  - ・基幹学校
  - ・実科学校
  - ・ギムナジウム
  - ・特殊学校
  - ・統合学校
  - ・職業訓練センター
- ドルマーゲンの競技スポーツは、年齢に応じたトレーニングをおこなっている。
- タレント発掘・種目に応じた施設がある。(ハンドボール、フェンシング、女子レスリング)
- 構図
  - 1987年 州にタレント発掘プログラムができた (子供のアスリートを探す)
  - 1997年 競技スポーツの連携校と半日制寄宿舍事業
  - 1999年 午後の子供指導 (11歳～15歳)
  - 2002年 スポーツクラスのあるスポーツ強化校
  - 2006年 全日制小学校を支援
  - 2008年 完全寄宿舍事業

## 〈ドルマーゲンの半日制寄宿舍事業と 競技スポーツ連携校〉

- ・スポーツクラブと競技スポーツ連携校が協力し合い、その他6つの連携校がある。
- ・バイヤードルマーゲンの近くにある3つの拠点においてプログラムが実施されている。
- ・ターゲットは、12歳以上のタレント少年少女、



講師：ハンス・ペーター・ケーニッヒ氏

- ・カーダー取得者。(タレント性のある優れた選手)
- ・トレーニングは、週5回の月曜日から金曜日まで行っている。

## 〈半日制寄宿舍事業の活動プログラム〉

- 教育プログラム
  - 一般的な宿題指導・宿題のサポート。学校で賄えないところを補う。
  - 大学入学までの教育指導、大学進学のための教師がいる。
- スポーツプログラム
  - 長いスパンでトレーニング出来るようにプログラムが組み立てられており、州から種目別の指導者を送り、オリンピックのスポーツセンターが、バックグラウンドになりサポートしている。
- サポート
  - 送迎 (学校↔施設)
  - 食事 (スポーツをする上での栄養面を考慮した特別食)
  - 保護者との連携をとる

## 〈スポーツ強化校のプログラム〉

- ・5年生、6年生のクラスで週6時間の体育の授業を行っていて、体育教師がクラスの担任になっている。

- ・TSV Bayer（製薬会社）とAC Uckerath（レスリング強化拠点）との密接な連携協力がある。
- ・常時生徒及び両親の相談に応じる。
- ・早朝トレーニングも可能で種目によってスキーなどの合宿に行くこともある。

## 〈プラネットシステム（宇宙システム）〉

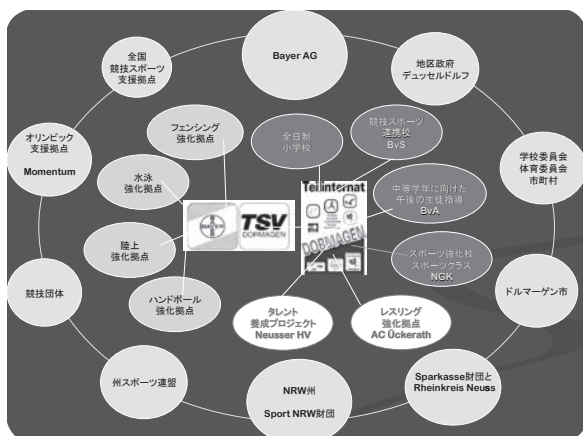
### 学校と競技スポーツの連携システム

TSVドルマーゲンの周りを囲むように各種目ごとの強化拠点があり、更にその周りを助成金で囲んでいる。

例えばフェンシング協会、州のスポーツ連盟、デュッセルドルフの州政府助成、ドルマーゲンの学校や市町村、ドルマーゲンの経済界、銀行のスポーツに対する財団、オリンピック支援拠点。

そして、一番大きなスポンサー。太陽のような存在としてバイヤー製薬がある。

今や、その太陽（バイヤー製薬）がなければこのプラネットシステムは成り立たない。



### 〈学校と競技スポーツの連携システム（ドルマーゲンの現状）〉

- ・現在の状況として、600人がタレント発掘に参加している。
- ・約280人が全日制的トレーニングに参加している。
- ・中等学年の生徒を対象とする午後の指導では62人の生徒がトレーニングを受けている。
- ・3つの拠点の半日制寄宿舍で99人のスポーツ選手がトレーニングに参加し、うち18人が全国カーダー、68人が州カーダーを得ている。19人の選手たちが完全寄宿舍に宿泊し、トレーニングに参加している。

### 〈ドルマーゲン半日制寄宿舍事業の成果〉

- ・スポンサーからの援助を得るには、成果を挙げなくてはならない。
- ・1997年からこれまでのメダルの数は、  
世界選手権：金メダル5、銀メダル6、銅メダル15、ヨーロッパ選手権：金メダル8、銀メダル7、銅メダル7、ドイツ全国大会：金メダル142、銀メダル118、銅メダル108で更にドイツ青少年記録保持者は2名いる。

- ◎スポーツが出来るからといって勉強が免除されるわけではなく、学力も重視している。  
トレーニングと勉強を両立させることが課題である。

## 質疑応答

Q どのような方法でタレントをセレクトするのか？

A 各ジュニアのスポーツクラブの中でタレントを作っていく。

指導者自ら学校に出向きタレントを発掘し、可能性のある子供をクラブに呼びプロフェッショナルに育てる。または半日制寄宿舍に入れる。テストをする。コーチが見つけてくる。  
※その中でトップアスリートになるのは、ごく一部である。

水泳の子供は週8回のトレーニングを行っている。（登校前5回、他3回）

年齢の低い子供のトレーニングは少ないが、半日制に入れると週5回は行っている。

Q 運動能力が高く多種目に対応出来る子供を選ぶのか、特化したスポーツでセレクトするのか？また、年齢の早いうちから種目を限ってしまうのか？

A フェンシングであれば集中力のテスト、ハンドボールはボールの巧みな扱いが出来るか、水泳はどのようにして水と向き合っているかを見分けている。

水泳とフェンシングは早いうちから種目を決めて行っているが、陸上などは後からでも間に合う。

（報告者：鈴木ゆかり）

# ノルベルト・ギムナジウム (クネヒトシュデデンの学校)

講師：クリスチャン・ヘンシエル氏 (タレント発掘事業担当)

この学校でハンドボールのコーチをされており、ハンドボールに適している子供たちを判断する役目をされている。自らハンドボールの競技スポーツされていた。またこの学校の制度に子供たちが合うかどうかの判断をされている。

この学校はドルマーゲン市の私立の学校で実質は国によって運営されており生徒数は約1,400名。この学校のパートナーとしている企業や団体はTSBドルマーゲン (ハンドボール)、ACウケラクラブ (女子レスリング)、ホンマッスパー (ゴルフ) があり、選手育成のための指導を受けられる。

寄宿制度は2008年8月から始まった。

目的は、競技スポーツの後継者の養成。(現在は19名のスポーツ選手が在籍)

ドイツ全体から応募があり採用される子供たちは特別な条件を満たさないといけない。

- ・スポーツ能力のテスト (競技別に専任コーチやプロなどが能力を判断)
- ・学業についていける能力
- ・社会性、社会能力、協調性

以上をふまえて総合的に判断する。

\*年間通して途中で入ってくる子や途中で辞めてしまう子はいる。

受け入れでは、このシステムの中でトレーニングしたい事ともっと早くから始めたい子供たちには近くの家庭に滞在してもらいトレーニングに参加してもらう。空いた時点で新学期から使用可能となる。また、この特別な寄宿舎の応募者は多いが、同時に受け入れ側も高い能力の子供たちをいろんな形で探して声をかけ学校に来てもらいテストを行う。専任コーチの4名が全員で判断する。

## ○19名の選手の種目別の内訳

ハンドボール→11名

サーベル (フェンシング) →2名



講師：クリスチャン・ヘンシエル氏

レスリング→2名

ゴルフ→3名d

陸上→1名

## ○校舎・寄宿舎

3F	プレイベートルーム	一人一部屋使用
2F	リラックスルーム	ゲームをしたりテレビを観たりでき、誕生日ごとに写真掲載、又選手達の試合と学校の試験スケジュールを書き込めるコミュニケーションスペースの場
1F	食堂・キッチン	食べ物が購入でき、寄宿生だけでなく他の生徒も購入できカフェテリアスペースの利用が可能。自炊もできるが、きれいに利用する事を徹底されている
B1	体育館・フロアー	簡単に運動できるスペース

\*他に体育館が3～4つある。それ以外に寄宿生の筋力トレーニング施設がある。

## ○費用

生徒1人につき月/440ユーロで年払いとなる。

## \*学費の支援

各種目で支援制度はあるが、ハンドボールは難しい。

ドイツではスポーツ財団・スポーツシュティツクンというものがあり、スポーツヒルゼという優秀なスポーツ能力をもった子供を保障する制度がある。

日本の奨学制度というものはないが、保護者が突然払えない場合には一時的に学校が立替払い

するか長期的な場合はスポーツ財団に支援を申請する。

### ○寄宿生の環境

日常は6時45分起床し皆で朝食、7時45分からトレーニングがある生徒は行く。その後、授業を受け昼食をとる。昼食後に宿題を済ませトレーニングを行う。このトレーニングを専門的に受けるため、他のクラブにいき学校専用のバスで送迎をする。種目別によって午後からのトレーニングの終了時間が異なるので夕食は各自バラバラでとることとなる。夜10時まで自由時間があり、10時以降就寝という流れが基本となる。

### ○日常の授業の中でのトレーニング方法（環境）

全体的に学校の理解と支援がありトレーニングが行いやすい環境が整っている。

- ・先生方は選手が積極的にトレーニングできるよう補佐している。
- ・午前中のトレーニングは特別に筋力トレーニング指導を専任トレーナーから受ける
- ・授業後は他クラブに行き、種目別の専任コーチのもとでトレーニングを受ける
- ・週2回種目別に定めたトレーニングをおこなっている
- \*寄宿生たちは学年が違うので通常の生徒達と同じクラスで授業を受けながらトレーニングを行っている。よって年齢が分散していても、個人にあわせて時間を調整されており、各種目の専任コーチのもとで集中トレーニングを行える。
- \*このような環境で2年間実施した子供たちは大きな成果をのこしている。
- ・フェンシングではリチャット・ヒューバース選手が世界選手権大会で優勝・銀メダル・銅メダ



ノルベルトギムナジウム校舎

ルを獲得し、成果を出している。

- ・レスリングではラウラ・メンテス選手がドイツ代表として48名出場できる選手要員に選ばれ、この学校から2名参加実績を残した。

このようにスポーツクラブが学校の体育の授業をサポートしており、各スポーツ財団・競技スポーツ・行政制度のネットワークを構成されている。学校が連携システムの中の一つの役割を行っている。クラブと連携しているのでスポーツ選手の能力を高めることができたり子供たちがスポーツ以外で発達できる重要な要素の意味をもっている。

## 質疑応答

回答はA：アクセル・ベッカー氏、C：クリスチャン

Q：学校の特徴は？

C：学校の特徴として、専任のトレーナーがおり、種目別というより特別に、筋肉トレーニングを授業の前に午前中に行う。他に週に2回種目別に授業の前に行う。種目別のトレーニングも授業の前に行う。寄宿舎生は13歳～19歳の生徒が19名いる。通常は他の生徒と同じ学習をしている。時間を選んでトレーニングを行う。トレーニングは1人だったり3人だったりそれぞれ異なる。

Q：普通の生活は？

C：彼らの生活は、6：45起床。朝食。7：45分～トレーニング。その後学校 夕方のトレーニングは種目において時間も内容も違う。ゴルフ3：30～、レスリング2：30～、ハンドボール6：30～、競技により様々である。夕食は一緒にならない。

Q：クリスチャンはどのような立場か？

C：私は、(説明者)ハンドボールの競技者ですのでハンドボールの指導は出来る。が、フェンシング、レスリングなどは他の人にゆだねる。子どもさんも学校の制度に合う子と合わない子がいるので宿舎へ入舎できるか否かその判断を行っている。

Q：途中入会、途中退会の子は？

C：部屋が19室あるので開き部屋があれば入会で

きる。以外は、近くの家家庭に宿泊してトレーニングに参加する。ここは特別な学校である。寄宿舎なので、応募し条件に見合った子だけ採用する。(入会できる)

ノルトバルセパーレン州からだだがドイツ全体から集まる。

**Q**：タレントの発掘？

**A**：能力の高い子がどこにいるかを観察する。自分たちのシステムにあった子を発掘し出向き勧誘する。

トレーニングの様子とか、試合の様子とかを見に行き学校へ呼び様々な運動能力をテストする。学校に4人のコーチがその活動をしている。全校1400名の生徒がいる学校である。11歳から19歳までがセンターで1,400名が学校の施設にいる。

**Q**：生活費や事業料は？

**A**：子ども月440ユーロ。一年分のお金を払って頂く。ハンドボールは支援を受けるのが難しいが他の物は支援金を受けることが出来る。ドイツの中にはスポーツ財団、スポーツフィルセなどスポーツの優秀な能力を持った子供に支援する制度がある。

**Q**：日本のように学校からの奨学金はないか？

**A**：ないと思う。たとえば両親が失業やなくなった場合は一時的には学校が立て替えるが長期的には先ほどの手続きをして制度を受ける事は出来る。

**A**：一つのことから全体像を描こうとするが重要なことだと思う。ここでは、競技スポーツを特徴づけることが出来たと思う。それはどういう点かという、寄宿舎生徒を迎える、一方ではスポーツ能力テストをしての判断をする。が、社会性など生徒との関係をふまえて総合的に判断をする。これが重要な点である。

**A**：ベッカー氏は今日でお別れしますので何か質問を出してください。

**Q**：フィットネスクラブの会費は月どのくらいか？

**A**：スタジオの費用等はサービスにより違う。150～280ユーロまん中で50ユーロだろう。競争も激しいところがありダンピングをして

いる。あるクラブは、月15ユーロのところもある。物が置いてあるだけでサービスが提供できないところもある。

**Q**：スポーツクラブに入っていない人たちへの呼びかけはどのようにしているのか？

**A**：イニシアティブで運動している人を会員として獲得して行くには何が出来るか？

毎日ジョギングなどで運動している人たちを獲得するには難しいだろう。水泳などをしてる人を獲得するのは簡単だろう。水泳の仕方などを指導するといいい、また、色々な案プールで泳げる仲間がいるなどと誘導する。

決まった方法があるのではなくアイデア次第で考え方がある。広報活動も重要である。クラブのことを知ってもらうことは必要である。子どもをクラブに連れてくる人がいたとします。子どもだけでなく両親に運動を進める。

**Q**：資格はあるのか？

**A**：大きく分ければ2つある。

一つは、職業としての資格。体育教師、栄養士、マッサージ師、理学療法士など、ボランティアでの資格。スポーツ指導者、ABC区別がある。

病気の関連のある資格。マネジメントの資格もある。クラブマネジャーの資格もある。ライセンスの違いがありCBAとある。広範囲で明瞭な研修制度を持っている。私は、週末を利用した研修の指導をしている。1単位60ユーロ、5週間であれば300ユーロである。クラブで費用を負担する制度もある。資格の基準はどのようになっているか？基本的にはどこも同じになるようにしてある。ドイツオリンピックスポーツ連盟での元がつくったモノを基準にしている。

**Q**：年に何回あるか？

**A**：参加者が減ってきているので難しい。クラブマネジャーのCの資格を8週間とるのに費やす。8週間を続けて受けられないので他の地区で受講する。

(報告者：長尾香織、小野里順子)

# クラブ視察



クラブ視察  
①

# コンシエンブロイヒ シニア世代スポーツクラブ

## —クラブの紹介、理事との懇親—

ムヴィムス・マティルデ理事長（写真中央女性）  
他10名の理事の方々の歓迎を受ける。

プログラムの参加者（会員）

男性259名、女性590名

理事9名、顧問2名 860名

元、銀行だったビルを3年前に約2,000万円で購入し、クラブハウスとした。

現在18のうち13のプログラムを行っている

①朝食の会

朝食と講義などもあり、12回続いている。  
80名～130名の参加

②腰に関する体操

現在は休止

③バス旅行

春と秋に各2グループ、12日間の旅行  
日帰りのレクリエーション

④ジムナスティック

男性中心 週1回 1時間半  
5グループ 各20～25名の参加

⑤記憶のトレーニング

週1回=10回コース 年3回

⑥心臓スポーツ

週2回 11グループ 120～130人  
医師1名と訓練を積んだ指導者3名  
Drからの指導でも参加  
持続力、瞬発力、記憶力など  
救命救急の訓練 心臓病の方へのサポート  
筋力トレーニングもある

⑦現在休止



シニア世代クラブの理事



シニア世代クラブとの意見交換

⑧ケーゲル

8～12のグループ 100名  
2週間に1回程度 年1回の大会

⑨文化プログラム

オペラ・劇・アイススケート  
ミュンヘンなどへ出向いての観賞  
合唱 月2回  
ダンス 月2回 高齢者への指導  
養老院への慰問

⑩現在休止



⑪スイミング

週1回 温水プール 水中体操  
病院と提携してのリハビリ  
3日間連続のコース

⑫現在休止

⑬現在休止

⑭バレーボール

週1回 男性のみ

⑮ウォーキング

週1回 ノルディックウォーキングもある

⑯山歩き・自転車ハイク

2週間に1回

⑰現在休止

⑱ヨガ



シニア世代クラブとのペナント交換

## Japan lernt Kegeln

Bis nach Korschbroich sind 14 Japaner bereit, um ihre ersten Pudel zu werfen. Im Sportzentrum am Hallenbad ließen sie sich gestern das Kegeln erklären. Zuvor hatten sie studiert, wie hierzulande Seniorensport funktioniert.

VON ROGER HINTZEN

NORSCHENBROICH Fast 10.000 Kilometer ist Takahiro Miyakazu gereist – und nun steht er im Keller des Sportzentrums am Korschbroicher Hallenbad vor einer Tafel mit röhrenförmigen Symbolen. Lange hat er die Bälle mit schwarzem Punktsystem in unterschiedlichen Anordnungen. Für die deutschen Gastgeber des weit gereisten Japaners ist völlig klar: Das sind Würfelbilder beim Kegeln. Doch in Miyakazu Heimat weiß das kaum jemand. Denn in Japan ist Kegeln unbekannt. Dem japanischen Manager und ein Dutzend weitere Manager japanischer Sportvereine gesteht bis nach Korschbroich kommen, um diesen ungewöhnlichen Sport kennenzulernen. Und nicht nur diese Bräun Verein Sport ältere Generationen gastieren sich die Gäste an, wie Seniorensport in Deutschland im Klub betrieben wird.

Andere als Kegeln sind Sportvereine in Japan nicht völlig unbekannt. Aber der Standard ist eine junge Erscheinung. „Japan fängt erst aus dem Vereinsport anzufangen“, sagt Axel Becker vom Sportamt des Rhein-Kreises Neuen. Dabei sind Becker, seine Kollegen und die Sporthochschule Köln. Interessante Themen ist dabei immer Seniorensport, wie das der Korschbroicher Verein aufzufinden. Denn auch die japanische Bevölkerung wird immer älter – und soll in Schwung bleiben. Wenn das sein im deutschen Verein möglich wird, ist es billiger als staatliche Organisationen. Das hat man in Japan schon erlebt. Auch bei in Kegeln zeigen sich die Gäste mit Nippono geht. Keine ist die Besuchergruppe auf der Kegelbahn eingeladen, startet er in die Auftritte. Ein mal ein Bierglas heben, protestieren – und Eisenergebnisse schauen. Das ist der erste Kontakt mit der Kegelbank Otsuka, eine von drei Experten in der Delegation, tritt auf die Bühne. Er hat eine Erklärung nach im Ausland und rufen im Wald. Doch die Sportler bringen ihre Kugel bis Zeit und hat auch in der Kegelbank. Die Delegation ist umhüllt – und zurückgereist Experten zusammen.



Alle Neuen schaffte hunk Otsuka gestern bei ihrem ersten Wurfen auf der Kegelbahn zwar nicht. Aber die japanische Meisterschaft des Kegelsports brachte die Kugel durch das Ziel.

INFO

Der Verein

Verleiher Es begann 1972 mit sportlichen Aktivitäten in der Korschbroicher Alters-Tagesstätte, damals waren die Senioren aber noch nicht als Verein organisiert. Vereinsgründung 19. Juni 1978. Sportangebot unter anderem Golfing, Yoga, Nordic Walking, Tennis, Gymnastik, Wandern, Heilspport, Kegeln. Kontakt: Angelika Aurlage, Ullrichstraße 1, 51701 Neuenkirchen. Besuch von Kulturveranstaltungen. www.suegko.de

Hans Hirsch, Kegelmeister des Vereins Sport ältere Generationen, muss gar nicht viel erklären. Zwei interaktive Spielstunden hat er nicht in einem Kegelclub marliert. Aber das bleibt erst mal zu. Das ist viel mehr als doch zu kompliziert. Hirscher er. Dabei lassen sich die ersten Versuche der Japaner ganz gut an Hirsch werfen auch, warum. „Aufträge werden geändert.“ Will heißt. Da kommt die Kugel kaum ins Schließfeld und es ist nicht das Ziel. Auch Takahiro Miyakazu will ausdrücklich wissen. „Auftrag – wer ich machst. Zu dem machst. Die Kugel landet in der linken Hand. Leichter ein „Faktor“ – aber auch das kennt in Japan zur Glück bringend.

新聞記事

(シニア世代クラブの理事とケゲルを体験)

### 財政

会費 5.5 €/月 66 €/年  
心臓スポーツ 6.5 €  
水中スポーツ 7 €

### 助成金

57,000 €

### 健康保険

85,000 ~ 90,000 €

### 目的

孤立しない高齢者を目指し、高齢者の元気を取り戻してきたい。

### ケゲル

日本版ボーリングのようなもの 競技もあるが、酒場でケゲルをしながら楽しむのが一番よい

### 課題

クラブの後継者の確保

(報告者：櫻木英一)

## TUSグレーベンブロイヒ

### サッカー部門の訪問 ユース育成コンセプトを学ぶ

#### 場所

ライン・ノイス郡庁舎の西南 徒歩で約10分

#### 会長の挨拶

クラブ会長ロイター・ツィーママンさんから、クラブ紹介を兼ねた次のような歓迎のあいさつをいただいた。

遠路の来駕を心から歓迎し、会長としてスポーツを通して交流が持てることに感謝している。また、このクラブは、1911年に誕生し、今年100周年を迎え、サッカーを中心に、ハンドボール・ビリーヤード・バレーボール・体操心臓病ケアなど多種目の事業を行い、会員は全体で約1800名その内約3分の1がサッカー会員で、シニア、ジュニア、ユースを統合したクラブとして発展していることをうれしく思う。

#### ユース担当者の説明

ユース担当のフリーデル・ゴイエンニッヒさんから施設の案内とユースの育成を中心に次のような説明があった。

##### 【施設について】

クラブハウスはクラブ所有で、その他は市から借用している。

スタジアム付のサッカー場のほか、森の奥にサッカー練習場2面のコートがある。陸上トラック・体育館を委託管理している。冬場は学校施設を利用しサッカーの練習をしている。

設立当初、サッカーは男子のものとされていたが、最近は女子にも開かれており、クラブは地域及びドイツサッカー協会に加盟している。

グラウンドの建設1925年 続いてスタンドの建設

##### 【成果】

1928年アムステルダムオリンピックで200メートル決勝に残った選手が当クラブ出身である。

U-19ドイツ代表の練習で3500人の観衆を集めた。



ロイター・ツィーママン氏 (左) と  
フリーデル・ゴイエンニッヒ氏 (右)

クラブのシンボルマークは、お城とライオンの盾でデザインされている (上記写真ご参照)。

尚、市の人口は65000人であり、内18000名がスポーツ人口である。

#### ユース育成について

サッカー部門には、40名の監督・マネジャー・コーチがおり、それ以外に世話役のボランティア・スタッフがいる。

チーム編成は、ミニバンビーニ・バンビーニ、Fユース、Eユース、Dユース、Cユース、Bユース (U16)、Aユース (U17)、となっており、バンビーニは、競技性ではなく楽しむことに重点を置き、試合結果は重要視しない。ユースは、8歳以上からのカテゴリーで2歳区切りとなっており、FとEは、基礎トレーニングにまたDとCは戦術トレーニングに重点を置き、Bから競技トレーニングを本格的に始めている。メンタルトレーニング (コーディネーション) や怪我をした選手の復帰についても配慮している。更に、監督の中には元FCケルンでプレーしていた者もあり、プロのクラブともコンタクトがある。程度の差はあるが、同じユニフォームを着て活動することで、一体感・向上心・到達目標が生まれ



クラブハウス外観



クラブハウス内

る。システムとしては、全員が必ずしもそうではないが、Fから順次上がることにより、伝統が継承されている。

子どもたちには9月に体験教室を1週間行い、入会募集をする。

#### スタッフについて

スタッフは、娘がサッカーを始めたのでお手伝いするなどのキッカケで、会社員・税理士・公務員などさまざまな人がボランティアとして参加している。

監督・コーチを含め基本的にボランティア活動であり、交通費程度の支払しかしてない。ドイツサッカー協会の指導ライセンスを取得することはクラブとして援助している。

なお、会長など役員は会員が会員の中から選出している。

#### パートナーについて

一番のパートナーは市、ボランティアは市民が頼りである。

グラウンドは、市がクラブのために作ってくれ、

現在も芝生の管理は市がやっている。施設は、有料の使用関係となっている。

スポンサーとしてスポーツメーカーが応援してくれる。格安にユニフォームを提供してくれる。

監督同志のネットワークを利用して、1部FCケルンのユースチームと合同練習をしている。

#### 財務について

会費はユースで月6ユーロであり、基本的に経費は会費で賄う。

その他スポンサーのユニフォーム公告の寄付やクラブ主催のフェスティバルでのケーキ・ソーセージの売上、冊子への公告スポンサー料を財源に充てている。

支出については、去年は6,500ユーロを要し、ボール代が最も多く、次いでユニフォーム代、監督コーチの交通費が主な支出である。

行政とクラブの連携役割分担についても、考えさせられるところがあった。

(報告：能田雅雄)



サッカーグラウンド



クラブハウスバルコニーにて

# クラブ視察 ③

## オルケン体操クラブ

～クラブ活動体験・理事との懇談・夕食懇親会～

### ○視察場所

グレーベンプロイヒ市

### ○視察内容

#### 〈クラブ概要〉

- ・1896年、少人数の体操クラブとして発足。
- ・1960年、自主財源（会費）により、体育館（小）建設。
- ・1991年、自主財源（会費）により、新しい体育館（大）建設。
- ・現在、会員数は約1,000名。子供からお年寄り（80歳）までの幅広い会員層。
- ・会員のうち、指導者は約40名。
- ・会費は、1人1月当り6.7ユーロ。家族で入会する場合は2人1月当り10.2ユーロ。ただし、水泳教室に参加する場合には、他施設を利用しているため追加料金がかかる。また、トレーニングルームを利用する場合は、1人1月当り2ユーロ必要。
- ・スポーツ教室だけでなく、会員によるコンサートや合唱大会、交流パーティーなどの文化行事も開かれる。

#### 〈施設〉

- ・体育館（大1、小1）、柔道場、トレーニングルーム、サッカーコート、ビーチバレーボールコートがある。
- ・クラブの敷地は、昔、市から自主財源で買い取った。
- ・サッカーコートは市所有のものであり、サッカークラブ（オルケン体操クラブとは別クラブ）が管理している。
- ・サッカーコートの周りには陸上トラックがあ



クラブ115年の歴史

- り、陸上クラブも活用している。
- ・体育館（小）の床は上下に可動させることができ、コンサート時の観客席などとして利用できる仕組みになっている。
- ・体育館は、午前中は学校授業で、午後はクラブの活動で利用されている。
- ・施設の補修などは、可能な限り全部自分たちで行っている。

#### 〈教室〉

- ・体操、柔道、筋力トレーニング、そしてサッカーが行われていた。
- ・自分の子供の試合には、家族ぐるみで応援に駆け付けている。

#### ①体操教室について

- ・8歳から16歳までの女の子が、近くにある州大会に向けてのトレーニングを行っていた。
- ・オルケン体操クラブ出身のコーチが指導をしている。
- ・競技スポーツとしての活動を行っている。

#### ②柔道教室について

- ・中学生くらいの男の子が6名ほど活動して



クラブハウス外観



グラウンド活動風景

いた。

- ・柔道のウォーミングアップとして、昼の上でホッケーを行っていた。

### ③筋力トレーニングについて

- ・老若男女問わず6名ほど活動していた。
- ・筋力トレーニング専門のコーチも配置されている（当日は不在）。

### ④サッカー（別クラブ）

- ・人口芝、夜間照明付きのグラウンドで、各年代別に分かれてトレーニングを行っていた。

### 〈懇親会の中での会話〉

- ・ドイツ人は、日本のスポーツについては全く知らない（興味がない）。
- ・教室後に仲間とビールを酌み交わす時間は、とても大事な時間。
- ・ビールの売り上げも、クラブの貴重な収入源。

（報告者：中村亮太）



理事の方との懇親会



理事の方とペナント交換

# クラブ視察

## 4

# TSVバイヤードルマーゲン

クラブマネジャーのアクセル・ヴェルツ氏の案内で、『屋外プール』『フェンシング場』『全天候型陸上競技場(400m)』『室内練習場(直線走路・高跳び・幅跳び)』『多目的施設(ハンドボール場)』等のそれぞれの施設の説明を受けながら視察を行った。

TSVバイヤードルマーゲンは1920年にサッカークラブと体操クラブが統合して始まったクラブで、その契機となったのはバイヤーからスポーツ施設を譲り受けることだった。その後、施設の移動や改修等を経て、現在はフェンシング、陸上、ハンドボール、水泳を中心に10種目、会員約4,700名で活動している。

温水プールは、数年前にバイヤーから譲り受けた施設で、気温零下20℃以下になっても水温が26℃に設定されている。水泳は州の強化拠点となっており、ナショナルチームに所属する選手が専任コーチの指導の下にトレーニングを行っている。その側では高齢者が水中ウォーキングを行っていた。

フェンシング場では、4名の専任コーチが指導しており、世界選手権に出場する選手も育てている。しかし、フェンシングは非常にコストのかかる競技であるため、選手を地域のヒーローとしてPRし、スポンサーを獲得することに努力している。

室内練習場は、直線走路や幅跳び、高跳び等の陸上競技のトレーニングを年中行なうことができ、子どもから成人まで幅広い年齢層の選手が使用している。

多目的施設は2002年にできた1番新しい施設で、2,600名収容することができる。この施設はハンドボールのメイン会場となっており、その他にも文化的イベントや障害スポーツを行う場となっている。さらに、保護者が安心してスポーツを行えるように幼稚園も完備している。

(記録者：慶田花 英太、宮崎 武洋)



TSVバイヤードルマーゲンシンボル



施設を案内してくれたアクセル・ヴェルツ氏



屋外温泉プール



屋外陸上練習場



室内トレーニング室



フィットネススタジオ風景



選手の寄宿舍